

令和元年5月29日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17292

研究課題名(和文) 汚染恐怖による強迫性障害に関する認知行動療法的研究

研究課題名(英文) Cognitive behavioural theory for fear of contamination in obsessive compulsive disorder

研究代表者

石川 亮太郎 (Ishikawa, Ryotaro)

東京大学・大学院総合文化研究科・特任助教

研究者番号：80625608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,350,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、嫌悪する人物と直接/間接的に接触することに対して強い汚染感と洗浄衝動が生じる汚染恐怖の強迫性障害が悪化されるメカニズムを検討した。質問紙調査および実験の結果、嫌悪する人物との直接/間接的な接触によって、強い汚染感だけでなく「嫌いな人物の特性が自分にうつってしまうのではないか」と心配する変身恐怖という症状がおこることを示した。さらに嫌悪する人物に対して生じる汚染感(精神的汚染や変身恐怖)は、思考と現実の混同などの、認知的要因によって悪化されることが示された。さらに、このような強迫性障害には、思考と現実の混同を変容させる認知行動療法が有効であることを示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、嫌悪する人物と直接/間接的に接触することに対して強い汚染感と洗浄衝動が生じる汚染恐怖のメカニズムを検討した。さらに、嫌悪する人物との接触によって生じる変身恐怖の重症度を測定する測定尺度を開発した。これによって、精神的汚染や変身恐怖に苦しむ当事者のアセスメントが比較的簡便に実施できるようになるだろう。さらに、精神的汚染や変身恐怖に対して、思考と現実の混同にアプローチする認知行動療法が有効であることを示し、これらの症状に苦しんでいる当事者とその家族、および治療者達に、心理学的研究に裏付けられた治療的示唆を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This study examined the mechanism about fear of contamination and washing urge in obsessive-compulsive disorder which occur direct or indirect contact with a disgusted person. Questionnaire and experiments study indicated that, direct or indirect contact with a disgusted person causes strong feeling of dirtiness and fear of morphing that worries that the characteristics of the disgusted person may infect me. In addition, studies showed the feeling of dirtiness (mental pollution and transformation fear) that experienced by contact with disgusted person is exacerbated by cognitive factors such as thought-action fusion. Furthermore, it suggested that cognitive behavioral therapy that try to change to thought-action fusion would be effective for such obsessive compulsive disorder.

研究分野：臨床心理学

キーワード：強迫性障害 精神的汚染 認知行動療法 変身恐怖

1. 研究開始当初の背景

強迫性障害は、意志とは無関係に繰り返し頭に浮かび不快感を生じさせる強迫観念と、強迫観念を振り払うため繰り返し行う強迫行為からなる。世界保健機構によれば、強迫性障害は身体疾患を含む全ての疾患の中で、生活を破綻させる疾患の第 10 位とされている。なかでも汚染恐怖（不潔恐怖）による強迫性障害は、「自分（または家族）に汚れがついているかもしれない」という強迫観念と、汚れを除去するために過度な洗浄行為を繰り返してしまう強迫行為（洗浄強迫）が主症状である。強迫性障害の患者の約半数は、汚染恐怖の症状を持つと報告されている。

これまで申請者は、強迫性障害における汚染恐怖を維持・悪化させるメカニズムを説明する認知行動モデルを、質問紙調査および実験研究によって検証してきた。大学生や臨床患者を対象にした研究の結果、過剰な責任感に関する信念（Inflated Responsibility）が、強迫性障害の汚染恐怖や洗浄強迫と関連していることを示した。さらには、不道德な記憶（e.g., 望まない性体験の記憶）を想起することによって、汚染対象に直接接触せずとも、自身の体が汚れたような感覚（精神的汚染）が生じることを実験によって示してきた。

2. 研究の目的

汚染恐怖の強迫性障害の症状として近年注目されている精神的汚染および変身恐怖に着目し、その認知行動理論の検証をおこなった。変身恐怖とは、嫌悪する人物によって汚染されたり、その人物の特性が自分にうつったりしてしまうのではないかと強迫観念にとらわれ、その強迫観念を中和するための強迫行為（過剰な洗浄行為）が止められなくなる症状である。本研究では、精神的汚染や変身恐怖が、どのような認知的要因によって維持悪化されるのかを検討し、精神的汚染や変身恐怖に対してどのような心理的介入が有効なのかを考察することをおこなった。

3. 研究の方法

研究 1: 汚染恐怖や変身恐怖がどのような認知的要因によって悪化されるのかを検証するため、大学生を対象にした実験をおこなった。実験では、実験参加者に、ある人物が使用していた手袋に触れてもらう課題を提示した。その際、実験群にのみ「不道德な人物が使用していた」という教示を与えた。汚染恐怖の測定には、手袋に触れた直後の汚染感と洗浄衝動を Visual Analogue Scale によって測定した。

研究 2: 精神的汚染における変身恐怖を測定するための心理尺度である変身恐怖尺度（Morphing Questionnaire）の日本語版を作成するため、大学生を対象にした質問紙調査をおこなった。分析では確認的因子分析をおこない、当該尺度が原版と同様の因子構造になるのかを確認した。同時に、日本語版変身恐怖尺度の収束的妥当性を検討するため、精神的汚染尺度、物理的汚染尺度、嫌悪感受性尺度、魔術的思考尺度との相関を検討した。

研究 3: 臨床患者（強迫性障害・不安障害・うつ病）を対象にした質問紙調査をおこない、精神的汚染や変身恐怖は、抑うつ、不安、嫌悪感受性といった変数の影響を統制した場合でも、魔術的思考や対人不信といった要因によって予測されるのかを検討した。

研究 4: 大学生および臨床患者（強迫性障害・不安障害・うつ病）を対象にした質問紙調査をおこない、性別、年齢、不安、抑うつ症状、嫌悪感受性の影響を統制しても、精神的汚染や変身恐怖は、思考と現実の混同や裏切りに対する脆弱性といった要因によって予測されるのかを検討した。

4. 研究成果

研究 1: 汚染恐怖および変身恐怖を悪化させる認知的要因を検証するため、大学生を対象にした実験をおこなった。その結果、嫌悪感受性や過剰な責任感といった要因は、不道德な人物が使用していた手袋にふれた際に生じる汚染感と関連していることが示された。しかしながら、変身恐怖を悪化させる認知的要因を検証するまでには至らなかった。

研究 2: 強迫性障害の汚染恐怖の症状である変身恐怖を測定する変身恐怖尺度の翻訳をおこない、当該尺度をもちいて大学生（ $n=224$ ）を対象に質問紙調査を行った。確認的因子分析の結果、変身恐怖尺度日本語版は原版と同様に、1 因子構造 13 項目が最もモデルの適合度が妥当であった（ $GFI = .91$; $AGFI = .91$; $CFI = .97$; $TLI = .96$; $RMSEA = .07$ ）。これにより、変身恐怖尺度の因子的妥当性が確認された。また、日本語版変身恐怖尺度の内的一貫性を検討した結果、Cronbach's alpha は .88 であり、当該尺度に十分な内的一貫性があることが示された。次に、変身恐怖尺度日本語版は、精神的汚染尺度、物理的汚染尺度、魔術的思考尺度と有意に相関を検討した（表 1）。その結果、日本語版変身恐怖尺度はこれらの尺度と有意に相関しており、当該尺度の収束的妥当性が確認された。

表1 変身恐怖尺度と他の尺度との相関

	強迫症	精神的汚染	魔術的思考	思考と現実の混同
変身恐怖尺度	.53**	.49**	.45**	.40**

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$,

研究3: 精神的汚染における変身恐怖がどのような認知的要因によって悪化されるのかを検証するための質問紙調査を、強迫症患者 28 名, 不安症患者 25 名, うつ病患者 20 名に行った。これらの臨床患者を対象にした重回帰分析の結果 ($n=73$), 変身恐怖は、抑うつ, 不安, 嫌悪感受性といった変数の影響を統制した場合でも, 魔術的思考 ($\beta = .34$) や対人不信 ($\beta = .33$) といった要因によって予測されることが示された。

研究4: 大学生および臨床患者を対象にした質問紙調査をおこない, 変身恐怖と思考と現実の混同および裏切りに対する脆弱性の関連性について検討した。学生調査では大学生 226 名, 患者調査では臨床患者 43 名 (強迫症群 17 名, 不安症群 16 名, うつ病群 10 名) が質問紙調査に参加した。階層的重回帰分析の結果から, 性別, 年齢, 不安, 抑うつ症状, 嫌悪感受性の影響を統制しても, 思考と行為の混同が変身恐怖を予測することがいずれの調査でも確認された。表2は臨床患者を対象にした階層的重回帰分析の結果である。この結果より, 思考と行為の混同は, 変身恐怖を悪化させる認知的要因であることが示された。

表2 臨床患者 (n=43) を対象にした階層的重回帰分析の結果

ステップ	標準偏回帰係数 β	
	1	2
性別	.07	.00
年齢	-.28†	-.26†
GAD7	-.06	-.21
PHQ9	.28	.22
DS-R	-.24	-.32*

MIS		.18
TAFS		.41*
調整済み R ²	.09	.28**
R ² 変化量	.20	.20**

Note:

GAD7: General Anxiety Disorder7,

PHQ9: Patient Health Questionnaire 9

DS-R: 嫌悪感受性尺度, MIS: 魔術的思考尺度,

TAFS: 思考と現実の混同尺度

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$,

以上の研究結果から, 思考と混同にアプローチする認知行動療法は, 精神的汚染や変身恐怖による強迫症を改善させるのに有効であるという臨床的考察を示した。精神的汚染や変身恐怖による強迫症に対する認知的アプローチには, ノーマライジング, ケースフォーミュレーション, 理論Aと理論Bの比較, 行動実験などが有効であると考えられる。さらに, これらの認知的アプローチと, 曝露反応妨害法などの行動的アプローチを併用することで, 汚染恐怖の強迫症に対してさらなる治療効果が期待できると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1 石川亮太郎(2017)「強迫症に対する認知療法—その方法と効果—」。精神科治療学 32(4), 485-489 星和書店・査読無

〔学会発表〕(計 2 件)

- 1 石川亮太郎. 強迫症における変身恐怖 -日本語版変身恐怖尺度の作成と変身恐怖を悪化させる認知的要因の検証- 第9回日本不安症学会学術大会 2017/3/11-12 九州大学.
- 2 Ishikawa R. Responsibility Attitude and Interpretation in Obsessive-Compulsive Disorder. ICASS 2017 : International Conference on Anxiety Symptoms and Signs, 2017/3/5-6, Rome, Italy.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。